かぎろひの春まだ寒く君死にて小草かれゆく
冬は來むかふ

ひとりしてのぼり來れる墓どころ心しづめて
友をおもはむ

霜いたくおきし小草を踏みつつぞ心を遣らむ
寂しかれども

あかつきより師團の兵はうごきしとおもひつ
つ居りこの丘のへに

山がひの平をつたふ地ひびきをかすかに感じ
岡の上に居り

日あたりのよき丘のべは春のごと青々として
もゆる草あり

機關銃の音もこだますみづうみを甲へる山の
かげより聞こゆ

われひとり歩みきたれる山かげに霜の白きを
かむる草々

墓のべにあらぬぎの木を植ゑむとて涙をなが
し語る友はや

霜

信濃路はあかつきのみち車前草も黄色になり
て霜がれにけり

朝づく日のぼるころしも繭倉のしろきを見れ
ば旅はしづけし

山々にうづの光はさしながら天龍川よ雲たち
わたる

國の秀を我ゆきしかばひむがしの二つの山に
雪ふりにけり

寒水に幾千といふ鯉の子のひそむを見つつ心
なごまむ

みすずかる信濃の國は車前草もうらがれにけ
り霜をかむりて

やま峡の道にひびけり馬車は秋刀魚をつみて
日ねもすとほる

ここに見る赤石白根の山脈は南のかたに低く
なりつも

桑の葉に霜の解くるを見たりけりまたたくひまと思はざらめや

ぬばたまの夜明けわたれる野の道に青き小草や霜がくれつつ

むかうより瀬のしらなみの激ちくる天龍川におりたちにけり

道芝の霜をいたしと思ほえて光あたらぬところ歩みつ

霜ふれる野のほそ川に青々と藻のゆらぐさへかなしきものを

みすずかる信濃の國や峡とほく日は入りゆきてなごりの光

信濃數日

道のべの水のながれに溜りにし柿の落葉をわれは見て居り

わが友は幾度かここを通りけむ高木の道をあへぎてのぼる

わが友のいのちをはりしこの村の公孫樹はすでに落ちつくしたり

しづかなる朝にもあるかみづうみに冬の靄こそたなびきにけれ

霜いたく降りたる朝の丘のうへ竹村のなかに水たぎちつつ

うらがれし道の小草にあはあはと入日の光い
まだ差し居り

そのかみに織田の軍よりやぶられし城あとど
ころ霜がれにけり

あまづたふ日の入りゆけば涯とほき北空にし
て濁るいろはや

高遠

十一月八日信濃國高遠町に繪島の墓を弔ふ。

あはれなる流されびとの手弱女は媼となりて
ここに果てにし

みすずかる信濃の國の高遠にかなしき墓を吾も見つるかも

信濃路に霜のいたきを我は見し柿の落葉にも栗の落葉にも

みすずかる信濃のくにの高遠に一夜ねむりて霜をあはれむ

童馬漫吟

九月廿五日土屋文明ぬしと鶴沼に澄江堂主人を訪ふ。夜ふけて主人は「安ともらひの蓮のあけぼの」といふ古川柳の事などを語りぬ。

相見つつうれしけれどもこの濱に心ほそりて君はありとふ

こもごものいひながら松原の空家のなか
にわれら入りゆく

ひんがしの相模の海にながれ入る小さき川を
渡りけるかも

煉乳の鑵のあきがら棄ててある道おそろしと
君ぞいひつる

うつそみの世はきびしけれ心足りて濱に遊ば
む我ならなくに

庭前の冬おのづからふかむ

畫ながら悲しかりとふ心にぞ黄なる落葉に照
れる日のいろ

日もすがら夜すがら落ちし公孫樹葉はこがらし吹きてここにたまりぬ

さいはひの如何なる人か和毛なすやさしき妻と相ともに寝る

冬の夜は音なかりけりさ夜ふけとふけゆくときに土氷らむか

この日ごろ

ゆふまぐれくろくなりたる灰に降る時雨の雨はさむくもあるか

あわただしき世に生くれども心しづめて紙帳にこもる冬になりたり

この日ごろ人を厭はむ思あり火鉢の熄を吹き
おこし居り

わがこころに障らふものもなかりけり更くる
夜なかに炭を割りたり

日もすがら落ちてたまれる公孫樹葉はさ夜ふ
けにして音もこそせね

この夜ごろ眠りがたし

しろがねも黄金も欲しとおもふなよ胸のとど
ろきを今しづめつつ

うつそみの吾を救ひてあはれあはれ十萬圓を
貸すひとなきか

たまきはる命をはりし後世に砂に生れて我は
居るべし

奉悼歌

大正十五年十二月二十五日今上天皇（大正天皇）崩御あらせたまふ。

ふゆのいかづちのとどろけるさ夜なかにわが
大王は息たえたまふ

おほきみのつひの御いのち白雪は天の原より
ながらふるなり

かすかなる臣のわれより三おほき御齢なりし
ことしぬびたてまつる

あかねさす日は照らせれどくにたみのなげき
きはまりてくらきがごとし

み民らはつどひ額ふしあめつちのくらきがな
かにたどき知らずも

大王のつひの行幸やきさらぎのこほれる道の
おとぞかなしき

かがり火は寒きちまたに燃ゆれどもこよひの
行幸かへりたまはず

きさらぎの氷れる道をきしりゆく御柩ぐるま
のおとは遠そく

昭和二年

昭和二年歳旦頌

しみとほるあかときみづにうつせみの眼(まなこ)ぢら
ひて年ほがむとす

いなびかり光るごとしと歎(なげ)きつついひし聖(ひじり)の
ことのかなしさ

くぐもりのさ霧がうへに寂かなる光てるごと
くあらしめたまへ

山房小歌

金澤治右衛門八十歳賀歌

伯父のきみはめでたやめでた高山の年ふるご
とくいのちながしも

伊東浴泉　一首

冬がれし山のうへより波だてるひむがし伊豆
の海を見おろす

生業

狂人(ものぐるひ)まもる生業(なりはひ)をわれ爲(す)れどかりそめごととも
人なおもひそ

平福一郎君、久保田周介君高等學校に入學す。

食ひしものおのづからこなれゆくごとくつづ
けざまにも吉報をきく

五月七日　一首

ぬばたまの夜(よる)にならむとするときに向ひの丘
に雷(らい)ちかづきぬ

浅草寺參詣

ひとときの心しづめむたどきさへなかりしわれと豈おもはめや

陸奥の山のみづ

みちのくの山のみづさへ常ならぬいたいたしき世にわれ老いむとす

夜ふけて紙屑籠にのぼりゐる蟻をし見ればうら和ましむ

いのち死にし友をぞおもふこのゆふべは鰌を買ひてひとりし食はむ

伊東浴泉雜歌の中

さびしとは分きておもはねど冬がれし山より水のながるるを見つ

伊豆の海にただにせまれる山のべのさむき泉に小鳥來て居り

見おろせるくろがねいろの伊豆のうみに西ふきあげて波たちわたる

冬の夜ふけわたりつつ鹹く湧きいづる湯はながれてやまず

かすかなる湯のにほひする細川に鱗のむれ見ゆるゆふまぐれ

春のはだれ

熱いでてわれ臥しにけり夜もすがら音してぞ
降る三月のあめ

晝すぎより吹雪となりぬ直ぐ消えむ春の斑雪
とおもほゆれども

とどこほるいのちは寂しこのゆふべ粥をすす
りて汗いでにけり

をさなごは吾が病み臥せる枕べの蜜柑を持ち
て逃げ行かむとす

わが身より熱おちそめしとぞおもふ生あたた
かき風をし聞けば

韮

南かぜ吹き居るときに青々と灰のなかより韮
萌えにけり

雨かぜのはげしき夜にめざめつつ病院のこと
氣にかかり居り

百鳥のさへづりかはす山なかにおのづからに
して死ぬるけだもの

はやりかぜにかかり臥ればわれの食ふ蜜柑も
苦しあはれ寂しき

熱おちてひとりこやれば口ひげの白くなれる
をつまみつつ居り

雨

生業(なりはひ)はいとまさへなしものぐるひのことをぞ
おもふ寝てもさめても

おのづから年(とし)を経(へ)につつうち解(と)けて交はる人
は少くなりぬ

狂院(きやうゐん)に寝つかれずして吾居れば現身(うつしみ)のことを
しまし思へり

むらがれる蛙(かはづ)のこゑす夜ふけて狂院(きやうゐん)にねむら
ざる人は居りつつ

うちわたす麥の畑(はたけ)のむかうより蛙(かはづ)のこゑはひ
びきて聞こゆ

あをあをとむらがりながら萌えて居る藜のう
へに雨ふりにけり

さみだれは寂しくもあるかいそがしくあり經
し吾を籠らしむなり

ものぐるひを守る生業のものづかれきはまり
につつ心やすけし

童馬山房折々

業餘の吟

いささかのつとめなすにも額より汗わきいづ
るころとなりつも

はだれ雪あはれに降りし日ごろより心つかれて明暮れにけり

夏草のしげみに立ちて吾おもふ心あわただしきのふも今日も

はりつめし心ゆるまむ時のまの遊をさへやこの日ごろせず

いなびかりひくく光るをいとけなき女の童子に見しめたりけり

ものぐるひの命終るをみとめ來てあはれ久しぶりに珈琲を飲む

をさなごの物いふきけばあはれなる言もいひけりひとり遊びて

澄江堂の主をとむらふ

夜ふけてねむり死なむとせし君の心はつひに
氷のごとし

壁に來て草かげろふはすがり居り透きとほり
たる羽のかなしさ

やうやくに老いづくわれや八月の蒸しくる部
屋に生きのこり居り

第四回安居會　自八月二日至八月六日於永平寺

あかつきに群れ鳴く蟬のこゑ聞けば山のみ寺
に父ぞ戀しき

古泉千樫君を弔ふ

よろこびて歩(あり)きしこともありたりし肉太(ぶと)の師(し)
のみぎりひだりに

息たえし師(し)のまくらべにいそぎ來て携(たづさ)はりけ
ることをおもはむ

うつつにし言ひたきこともありしかど吾より
先(さき)にいのち死にゆく

子規忌歌會　九月十七日於田端大龍寺

秋づきし庭のおもてにさす光こころしづけし
苔(こけ)も落葉(おちば)も

大龍寺卽事 二首

しづかなる庭に午後の日さしをりて槻の落葉
は片よりにけり

寺なかのともりし白き電燈に蟷螂とべり羽を
ひろげて

庭前 二首

しぐれこし吾が廢園の帚ぐさ赤らみにけりか
たむきながら

むらがりて庭に衰ふるあら草にさ霧は白しい
で立ちみれば

赤彥忌 十月十六日豐平村 寄稿

みまかりし友を偲びにゆかんころ信濃の山は
色づきぬべし

上林溫泉歌會 一首

秋さむくなりまさりつつ旅を來て北信濃路に
鯉こくを食ふ

悼芥川氏 一首

むしあつくふけわたりたるさ夜なかのねむり
につぎし死をおもはむ

永平寺吟

アララギ第四回安居會

大き聖いましし山ゆながれくる水ゆたかにて
心たぬしも

海をわたりて聖が負ひし笈見れば尊くもある
かあはれ尊し

もろともにここに明暮るる大衆の淋汗の日に
われもこもれり

あしびきの山のはざまに白雲のうごくがごと
く人は住みけり

朝よひにおしいただきて食(は)む飯(いひ)は鱗(うろくづ)の香(か)ぞなかりけるかな

大佛寺途上

ひんがしにむかひいくたびか踏みわたる谷川(たにがは)の香(か)は親しくもあるか

ひるながら人のおとせぬ山なかに入りて來にけり百鳥(もも)(とり)ぞ啼く

うつせみの苦(くる)しみ歎(なげ)くこころさへはやあはあはし山のみ寺(てら)に

谷間(たにあひ)はいまだ源(みなもと)に遠からし山みづの音(おと)のこもるを聞けば

葛の花ここにも咲きて人里のものの戀しき心
おこらず

夏山のみちをうづめてしげりける車前草ぞ踏
む心たらひて

玲瓏巖

いにしへの聖はこひし山中のここに明暮れし
ことぞこひしき

大き聖この山なかの岩にゐて腹へりしときに
下りゆきけむか

谷に生ふる高杉の秀のゆらぎをぞかく目ぢか
くに見るは樂しき

谷川の音たえまなきあかつきにいにしへびと
ぞここに居りける

蟻地獄砂にこもりてゐるを見つかりそめのご
と見てか過ぎなむ

この巖より滲みいづる水かすかにて苔の雫と
なりがてなくに

杉の秀のうごくを見つつついにしへの聖のあと
に吾ぞ居りける

きぞの夜にねむり足らはず覺めしかばこの岩
のはざまにまどろみにけり

志比川の谷の入さへ白雪のふりつむころに道
絶えぬべし

冬ふかみ志比谷川の奥谷に夜半はしづかに雪つもるべし

門外・歸途

ほのぐらき承陽殿のあかつきに石のたたみに額を伏したり

晝すぎし龍門外にわれは來て氷水をばむさぼりて飲む

山なかの畑を見ればきなくさき煙を立てて燃えをるものよ

おくつきを清めに行くと脚絆をはきし少女の尼を見ればまがなし

門外の極樂橋のほとりにて少女の尼と今か別れむ

永平寺漫吟補遺

あかつきの光はつかに差しそめし木立が梢に夜の鳥ぞ啼く

夏ふけし山のみ寺の杉むらに朝雨ふるを見て立つわれは

志比川の谷を入り來てうらやすし杉生のなかの落葉を見れば

ながれあふ谷間のみづはあるときにしぶきをあげて此處にあふれぬ

しづかなるこの谷合に青々と稲田いくつかあるも親しき

道のべにどくだみの花かすかにて咲きゐることをわれは忘れず

山がひの畑にひとりの女子は布を燃しぬ蟆子の來ぬがに

十國峠

ひがしかぜ吹きしくなべにここよりぞ天城の山はおほにくもれる

小鴉は茅がやすれずれに飛び交へり海をぞよろふ峠のうへに

ひと乗りてけふの朝明に駿河よりのぼり來し
馬か山に草はむ

うちきらひ駿河の海は見えながらここより遠
き甲斐が峯くもる

音立てて茅がやなびける山のうへに秋の彼岸
のひかり差し居り

青山墓地

をさな兒のきほひ遊べるころはしてこの墓原
も野分すぎにし

こまかき蚊むらがりくれば我足の靴下のうへ
より刺せりその蚊はや

百日紅さきのこりけるをあはれみて墓のあひだをもとほりにけり

ならび立つ墓石のひまにマリガレッといふ少女の墓も心ひきたり

雨はれて秋の日のさす墓原を今しよこぎり行きし靴おと

しばしだに墓原くれば遊びありくひとの如くに心なごめる

戰に果てにしチエッコスロワキアの兵士の墓も見て過ぎむとす

かりがねの來鳴かむころをわれひとり墓地の草生に疲れつつ居り

信濃行其一

くらがりをいでたる谷の細川は日向のところを流れ居りにき

遠山は雪ふれるときつゆじもに濡れしもろ草わけつつぞゆく

あたらしき馬糞がありて朝けより日のくるるまで踏むものもなし

はざまより空にひびかふ日すがらにわれは寂しる鳴澤のおと

こがらしのしきりてぞ吹く晝つかた黒姫山にただに對へり

うちひさす都をいでて山川のさやけき國をわ
れ行かむとす

湯のいづるはざまの家にふりさけし五つの山
は皆晴れにけり

いろづきて夕日に映ゆる山もとの湯いづる里
にわれは近づく

信濃行 其二

稲を扱く器械の音はやむひまの無くぞ聞こゆ
る丘のかげより

ひたひより汗はにじみてしばしだに山を歩む
はたのしかりけれ

山ふかき杉生のなかにおちたまる杉の落葉は
いまだひろはず

晝しぐれの音も寂しきことありて日ましに山
は赤くなるべし

山がひの空つたふ日よあるときは杉の根方ま
で光さしきぬ

とどろける谿のみなかみにあはれなる砂川みむと常におもはず

谷あひの杉むら照らす秋の日はかの川しもに落ちゆくらむか

奥谷の川原の砂に香にたちてあらき山みづ湧くところあり

信濃行 其三

たどりこしこの奥谷に家ありて賣れる粽はま
だあたたかし

わが友は語りつつゆくトロッコにて二匹の牛
の死にけることを

湯の宿に一夜ねむりし朝めざめまたたびの實
の鹽漬を食ふ

三年まへ秋ぐちにして洪水のあらしし川原よ
こぎりにけり

たぎりつつ湧きいづる湯にしの竹の青々とせ
しを束ねしづめぬ

湯田中の川原に立てば北側はつかに白し妙高の山

石原の湧きいでし湯に鯉飼へり小さき鯉はこに育たむ

ひとむきに泳げる鯉はわきいでしなまぬるき湯に育ちけるかも

天龍川其一

昭和二年晩秋講演をへてのち天龍峽にあそぶ。

ぬばたまの夜のあけがたの霜ぐもる國の平は川の音ぞする

信濃路や天のなか川に立つ波の寒きひびきを
間近くに聞く

峡すぎて見えわたりたる石原に川風さむし日
は照れれども

きのふまで時雨の雨のふりしとふ天龍川を漕
ぎくだりゆく

冬日てれる天龍川の川舟にしまらく吾の言ぞ
たえたる

信濃なる天龍川のたぎちゆく寒きひびきの常
ならなくに

あしびきの山峡ひくく流るるときしぶきをあ
げて川波立てり

天龍川其二

きはまりて晴れわたりたる冬の日の天龍川に
たてる白波

雨はれて寒きかぜ吹く山がはの常なき瀬々の
音ぞきこゆる

山がひの天のなか川漕ぎくだりて川瀬をひろ
み波たちわたる

天龍川の中つ瀬にして浪だてりしぶきはかか
るわが額まで

ひた晴れに澄みきはまれる冬空やきのふまで
こそ時雨ふりしか

奥やまの秀には眞白く雪ふりて駒が根つづき
のひまに見えそむ

天龍をこぎくだりゆく舟ありて淀ゆきしかば
水の香ぞする

おのづからなりのままにとどろきて奇しき
山水やうまし山がは

南へながるる川を漕ぎ來つる舟は走れりたぎ
つ瀨ごとに

ゆふがれひ食ひつつ居れば川波の寒きひびき
はここに聞こゆる

天龍のいく激つ瀨をくだり來て泡だつみづを
見れど飽かずも

妙高溫泉　其一

さむざむと時雨は晴れて妙高の裾野をとほく
紅葉うつろふ　土屋文明君同行

起伏は北へのびつつわたつみの海よりおこる
山ひとつ見ず

道草のうごくを見れば妙高の山をおろしてこ
がらし吹きぬ

もみぢばもうつろふころか山ひだに屯せる雲
うごきそめつつ

北空のけむりのごとき涯まで越後の國に山は
起伏す

妙高溫泉　其二

ゆき降れる襞も見えつつ今しまし山のうつろ
に雲うごくらし

妙高の裾野のなだり音ぞして木枯のかせひく
く過ぎつも

まぢかくに直にいむかふ黑姫や山は樂しと言
はざらめやも

しぐれの雨あさまだきより晴れをりて北國街
道ふくかせ寒し

むらぎもの心しづけし雲はれて入日にかげる
黑姫山は

しぐれ降るころとぞ日和さだめなき越後の山
に一夜ねにけり

朴の葉の青きを見れば心あやし紅葉すがれし
山なかにして

鹽づけにしたる茸を友として食へばあしびき
の山の香ぞする

晩秋

かたばみの青々とせし葉をぞ見る廢れし園に
霜ふりしかど

うらがれて白くなりたる古草に新草まじり生
ふるさへ見む

郊外の家の庭には唐辛子をむしろのうへにも
り上げて干す

けふ一日つめたき雨は群立ちてすがれそめに
し雑草に降る

ちちの葉の黄にみだりつつ散りぬるを心にと
めむ人さへもなし

業をへし勞働者の入りてゆく日比谷の園にし
ぐれふる見ゆ

今ふりし時雨とおもふにさむざむとアスファ
ルト道の泥をながせり

一人してしばしあゆまむ公園に時雨は降りぬ
橡の落葉ふかく

業餘の吟

庭隈の苔をぬらして朝よりしぐれの雨は降りにけるかも

亡き友のなきを悲しみ信濃路のみ寺のなかに一日こもりぬ

かりがねは夕空たかく飛び行けりいづらの里に落つるにやあらむ

秋萩のうつろふ見ればこの庭のなべての草に照る月もがも

しみじみと見しは幾年ぶりならむむらがり匂ふ菊のとりどり

菊花大會三首

白菊のもりあがりたる花瓣は心しづかに見る
べかりけり

くれなゐに群がり咲ける小花さへ菊はかなし
きものとぞおもふ

老にむかふ命かすかに生くれども何におそれ
て明暮れにけむ

月讀のいまだ出でざる宵闇にわれの立ちにし
庭のうへのつゆ

つらなめて空にひびける飛行機は向をかへし
と思ひつつ居り

木曾やまに啼きけむ鳥をこのあしたあぶりて
ぞ食ふ命延ぶるがに

いとまなき吾なりながら冬ふけし信濃の國の
河さかのぼる

朝あけし厠のなかにゐておもふけふのゆふべ
は何を食はむか

みすずかる信濃の友のたまはりし紙に澁ぬり
ぬ日向にいでて

わが庭のいまだ枯れざる小草にはつゆじもし
げし空晴れしかば

血すぢひきし人の世事に苦しめる備後のくに
の友をぞおもふ

この日頃

けならべてあわただしくも暮れゆけど心さび
しき事ありにけれ

ゆふぐれし机のまへにひとり居りて鰻を食ふ
は楽しかりけり

いちはやくうらがれそめし草なかにけふも日
もすがら小鳥のこゑす

つゆじもはしとしとしてしげけれど日毎に
し見むわれならなくに

うらがれて白くなりたる草叢にかくろふ鳥は
心やすきか

北窓に目張をしつつこの冬を心しづかに我あ
りぬべし

うつしみの吾が目のまへに黄いろなる公孫樹の落葉かぎり知られず

ももくさにけふのあさけのつゆじもは時雨の雨のふれるがごとし

北びさし音するばかり吹くかせの寒きゆふべにわれ默しをり

雜歌

長塚節忌歌會　二月二十七日

きさらぎに降りたる斑雪すでにとけ消のこる見れば君し偲ばゆ

うららか（雜誌キング四月號のために）

低山の雪は消えつつ日もすがらかぎろひの立つ國を吾れゆく

雪げ水谿にみなぎりとどろけるみちのく山にうぐひす啼くも

さわらびの萌えいづる野にわれひとりけふも來にけり鎌をもちつつ

四月土岐善麿ぬしの洋行を祝して

われかつて心をこめて見入りけむドナウの河を君も見るべし

子規忌歌會　九月十七日

常臥(とこぶし)の痛し痛しと苦しみて泣きたる人は竹(たけ)の里人(さとびと)

昭和三年

折に觸れつつ

一月の二日のゆふべ物戀しき心をもちて出で
て來にけり

けさ搖りし地震のみなもとは金華山のひむが
し南の沖にありとふ

つかれつつ寢ざむるものか寒にいりてなまあたたかき夜にものの音もなし

よるふけし街の十字にしたたかに吐きたるものの氷りけるかも

墓地の木にすくふ鴉かむらがりて我がいへの雞おそふことあり

自動車のわだちが附きて日もすがらこほれる泥は五日あまり經ぬ

うつし身は現身ゆゑになげきつとおもふゆふべに降る寒のあめ

あわただしく起臥すわれに蕗の薹くふべくなりぬ小さけれども

雪のうへに二月なかばに降る雨のしき降るときに心いらだたし

はやりかぜ癒えかかりつつ冬の夜の冴えたる月の光をぞ見し

一夜あけばものぐるひらの疥癬に藥のあぶらわれは塗るべし

近時

釜山なるひとりの友を夢に見つ夜ふけてよりねむりたりしに

わが庭に來ゐる鴉のくちはしに綿をくはへて飛べるは寂し

をさなごは「なるほど」といふ言おぼえて朝な夕なにしきりに使ふ

うるはしき女なりしと聞きしかど相見むこともなかりけるかな

うちかへす古綿を日にほしけるに鴉ふたつがおり立つあはれ

浅草をりをり

觀音の高きいらかの北がはは雪ははつかに消え殘りけり

人だかりのなかにまじはりうつせみの命のゆゑの説法を聽く

淺草のきさらぎ寒きゆふまぐれ石燈籠にねむる雞(とり)あり

川蒸氣久しぶりなるおもひにてあぶらの浮ける水を見て居り

みちのくより稀々(まれまれ)に來るわが友と觀音堂に雨やどりせり

この日ごろ

けならべて體(からだ)の無理をとほせりとおもひて夜(よ)半(は)にかへり來にけり

哀草果(あいさうくわ)のおもてほてりてみちのくの農村(のうそん)のことを吾に語りぬ

この日ごろはやれる天然疱瘡は支那の國より
わたり來りき

あづさゆみ春ふけがたになりぬればみじかき
蕨朝な朝な食ふ

日曜の朝寢をすれば節々は痛むがごとし疲れ
けるらし

折に觸れて

難破船より救はれたりし人なかにミングといへる犬が居りたり

きさらぎはそこはかとなく過ぎ行けりわが北窓のべに砂たまりつつ

現身(うつしみ)のわれ死ぬるとき氣味(きみ)よしとおもはむ人
は幾たり居(ゐ)むか

わがいのち絶えゆくことを喜(よろこ)ばむ人のこころ
は sadisme(サヂスム) に似む

みちのくを我はおもへりこの夜ごろ雪ふりつ
もる山がはのべを

青根

岩代にむかへる山の起伏(おきふし)は青々として此處(ここ)よ
はるけし

しげやまのうへにまぢかく見えてをる藏王(ざわう)の
山は雷(らい)なりわたる

春ふけて最上(もがみ)だひらの女(をみな)らもここの溫泉(いでゆ)にうたをうたへり

消(け)のこりし雪のはだれはみちのくの藏王の山にけふも見るべし

雪きゆる藏王(ざわう)谿(だに)よりながれ來て川遠(とほ)じろし見おろしにけり

C 病棟

郊外の病院に來て夜(よる)ふけぬ田ゐの蛙(かはづ)のこゑ減りにけり

水に住むこまかき蟲は病棟(びやうとう)のたかき燈(あかり)にしばし群れける

おしなべてつひに貧しく生きたりしものぐる
ひ等はここに起臥す

むらぎもの心ぐるひしひと守りてありのまに
まにこの世は經べし

さみだれの暗く降りしくきのふけふ心はりつ
めて事にしたがふ

業餘小吟

かすかなる燈とぼりて飛行機は梅雨の晴れし
夜空に飛べり

現世を憤るとにはあらねどもこの日ごろわれ
夜半に眠らず

みすずかる信濃のくにの山がひに聲さやさや
し飛ぶほととぎす

時のまの心あやしもむくむくと疊うごきて地
震しづまりぬ

漸くに老いづく吾やあるはずみにアルプの山
を思ふことあり

五月雨の雨の晴れたる夕ぐれうなぎを食ひ
に街にいで來し

はりつめし吾の心を歌よみにうつつ拔かすと
人なおもひそ

ゆふぐれの光に鰻の飯はみて病院のことしば
しおもへる

仙臺

阿部次郎教授宅

みちのくに來しとおもへば樂しかりこよひし
づかに吾はねむらむ

さ夜ふけと更けわたるころ海草のうかべる風
呂にあたたまりけり

朝がれひ君とむかひてみちのくの山の蕨を食
へばたのしも

わがこころ和ぎつつゐたり川の瀨の音たえま
なき君が家居に

いとまなき吾なりしかどみちのくの仙臺に來
て友にあへるはや

三山參拜の歌

昭和三年七月二十八日午後九時三十分上野驛をいで立つ。二十九日朝上山驛にて高橋四郎兵衞、同重男と落合ひ同車しつ。羽前高松驛下車。高松より海味を經て、午前十時五十分本堂寺著。此間一部乘合自動車。それより徒歩にて午後四時志津著、投宿。本堂寺も志津も、明治二十九年（予十五歳）、父に連れられて宿りし處なるが、今は參拜者も少く、なべて壙界ひそかなり。

志津　七月二十九日

月山にはだらに雪の殘れるを三人ふりさけ心
樂しも

黑々としてつづきたる森の上に月山の膚斑に
見えそめつ

夕がれひの皿にのりたる木布海苔は山がはの
香をわれに食はしむ

死のごとしづまりかへる沼ありてゆふぐれ空
に啼くほととぎす

ゆふぐれてわれに寄りくるかすかなる蟆子を
殺しつ山の沼のべに

暮れきらぬこの谿中にとどろきて巖をくだく
音ぞきこゆる

山がひの夏のゆふべに立つ風に青くさやけき
草々なびく

夕闇はほのあかりつつ山のうへにあはあはと
大き月いでにけり

腰すでにまがりし父とこの里にひと夜宿りし
ことしおもほゆ

羊齒の葉のむらがり生ふる小澤にも下り來り
て心は親し

にぎり飯を持てこし見ればほほの葉に包まれ
ながらにほふひとときし

湯殿山　七月三十日

朝くらく志津を立ちいで道いそぐ川を渡れば
しぶきに濡れつ

大井澤わたらむとして岩魚釣りその歸り路の
山びとに逢ふ

鳴澤の音聞きながらあまつ日の未だのぼらぬ
石ふみわたる

神山にさしかかりつつ谷川のうへ吹く風に汗
ひえむとす

湯殿山一の木戸なる藥湯のあつきを飲みてい
ろいろ話す

湧いづる谷まの水に水芭蕉ひいづにひいづゆ
ゆしきまでに

一の木戸の笹の家に焚火しつつ居り夏の最中
もわが膚寒く

水芭蕉生ふるを見れば人いまだ無かりしころ
の草木おもほゆ

雪谿の雪のさかひに山草はやうやく萌ゆるその芽愛しも

夏ふけしここに萌えでし小草らに間もなく雪は降りつもるべし

ほうほうとけむりだちつつ目交に氷の谿はいまだ續けり

われ等ゆく道の向ひの雪谿に罅入りて居り恐ろしく見ゆ

山道は仙人嶽に差し懸り牛の舌といふ草など茂る

ここにしてわが立つ湯殿の山谷は朝日が嶽の谷とむかへり

三人(みたり)していこへる山のいただきに吹く風強し
なびく山草(やまくさ)

雪谿(ゆきだに)をわたりつつ居り底に鳴る音をし聞けば
雪解(ゆきげ)のおとぞ

むらぎもの心畏(おそ)れずこごしこごし湯殿(ゆどの)の谿(たに)を
默(もだ)してくだる

わが父も母もなかりし頃よりぞ湯殿(ゆどの)のやまに
湯は湧きたまふ

谷ぞこに湧きいづる湯に神(かみ)いまし吾(われ)の一世(ひとよ)も
神のまにまに

鐵(かね)いろに赭(あか)く湧きづる御湯(みゆ)にしてくすしく尊(たふと)
この谷のそこ

梵字川とどろき落つる岸に立ちわれを育みし
父母しぬばゆ

額伏してわが居たりける山谷にみ湯のとどろ
く音ぞきこゆる

この吾を護り給はなあはれあはれ父母のため
をさなごのため

月山　七月三十日

高山をのぼりてゆけば山の上ににほふ草あり
かなしとおもふ

月山の山のなだりに雪げむり日ねもす立ちて
そのいつくしさ

谷々を見おろしながら行けれども月讀のやま
いまだ遠しも

あまつ日はひとときき見えてしかすがに白々と
して笠をかかむる

さ霧たつ月讀の山のいただきに神ををろがむ
草鞋をぬぎて

吹く風はさ霧をおくり行きがたし眼鏡はづし
て走りてくだる

ひさかたのさ霧に濡れてひたぶるに月山の道
くだりくだりぬ

岩道のこごしき道をくだらむと遠山河も見る
こともなし

月山をくだりくだればやうやくにさ霧の雨に
逢ふこともなし

笹小屋にひとときいりていこふなべ笹竹の子
の長きを食ひぬ

味噌汁に笹竹の子を入れたるをあな珍らあな
難有と云ひつつ居たり

小屋の外はまだ強き風ふきやまず身ぶるひを
する現身三人

道すがら宿らむとして幾たびか笹小屋のぞき
つひに宿らず

ひたぶるにくだりくだりて羽黒山森は見ゆれ
ど遠くもあるか

あるところに高山の草養へる園がありたり臥して見入りつ

月山のいただきにこよひ寝ねたらば好かりしならむと吾等おもはず

なぜならば振返り見る月山のいただきに雲の亂れてをれば

一合め一合めと吾ら下りつつなほもはるけし羽黒の山は

眼したに羽黒の森は見えぬれど行著きがたし共に疲れぬ

峠にてほとほと疲れ心太みたりは食ひぬ腹ふくるるに

ゆふ闇におびただしき蚊のいで來るを怪しみながら羽黑にむかふ

懷中燈にて道照らしつつ行きゆくに大き月いで羽黑を照らす

羽黑やま手向のむらの入口に動けぬまでに疲れはてつる

羽黑

七月三十一日

やどりたる隣りの部屋に教員と役人とふたりなかなか寢ねず

朝まだきに眼ざめしかどもわが足の痛みのまにま立ちても行かず

朝がれひ旨らに食へど足いたし諸足いたしか
がみがたしも

しづかなる羽黒の山や杉のまの石の階を匍ひ
つつのぼる

神いますの羽黒の山にのぼり來てわが身は清し
汗をさまりぬ

年ふりし杉の木立の木下やみ家いでてより吾
は遙けし

やうやくに年老いむとして吾は來ぬ湯殿やま
羽黒やま月讀のやま

みちのくの出羽のくにに三山はふるさとの山
戀しくもあるか

歸路　七月三十一日

最上川水嵩まされどしかすがに山がはのごと
おもほゆるかも

心和にのびのびとして見はるかす鳥海山は晴
れ月山くもる

東風ふきつのりつつ今日一日最上川に白き逆
浪たつも

海にちかづく最上川とし思ほえどいまだ鋭き
流たもてり

新庄に汽車とまるまもなつかしき此國びとの
おほどかのこゑ

出羽三山

いつしかも月の光はさし居りてこの谷間より
立つ雲もなし

みちのくの湯殿の山に八月のこほれる谿をわ
たりつつゆく

常ならぬものにもあるか月山のうへにけむり
をあげて雪とくる見ゆ

わが父がわれを導きこの山にのぼりしころは
腰まがり居き

をさなくてここに來りしこともへばわれの命
も年ふりにけり

うつせみの願をもてば息づきて山の谿底に下りきたりける

最上平野を過ぐ

ひむがしの藏王を越ゆる疾きかぜは昨日も今日も斷ゆることなし

草むら

七月のつよき光のさしそめし草むらなかに草刈らむとす

夜半すぎに起きてをさなごの遊ぶこゑ何か足らへるこゑの聞こゆる

ひとりして机のまへにゐるときもわが體より
あぶら汗いづ

さすたけの君がなさけは信濃路の高山の蕨け
ふぞ持てこし

秋になりし濠に何千といふ魚族しろく浮きあ
がりけり

飛行機のうへよりとりし山脈の寫眞は寂しけ
ふも我が見つ

家に飼ふ小鳥いくつもまぢかくの墓地の林に
住みて居りとふ

絶間なきものの響やわれひとり野分だつ庭に
いで來りける

飛行機のうへより見ゆる佐渡が島のその寫眞
をも吾は愛せり

夜もすがらたまゆらも眠りがたしとて吾にむ
かへる勞働人ひとり

馬場先の青々とせし濠のみづ鵜の來てくぐる
ことぞさびしき

歌會

長塚節忌

二月十一日
於松秀寺

身まかりし君の年よりも十あまり吾の齡は多
くなりたり

島木赤彦忌　三月二十五日於松秀寺

木の芽だつ春のゆふべとなりぬれば心しづかにわれひとり居らな

仙臺アララギ歌會　五月十九日於木町通蝶花堂

旅を來し一人ごころに松島の瑞嚴寺にて砂の道踏む

正岡子規二十七回忌歌會　九月三十日於田端大龍寺

うつせみは寂しきゆゑにたづさはり君にすがらむ世にし亡しとも

折々の歌

あかつきに小芋を入れて煮る汁の府中の味噌
は君がたまもの

ものの冷ゆるころとはなりて朝々の薄明より鳥
は群れ立つ

獨逸書のこまかき文字は夜ふけて見む競なし
老いそめにけり

たちまちにいきどほりたる稚兒の投げし茶碗
は疊を飛びぬ

いのちせまりて子規の書きける俳諧をけふ三
越に吾も來て見つ

人だかりの後ろよりわれのびあがり正岡子規
が遺物見にけり

たまたまは頭いためど直ぐ癒えて身に病なく
起臥すわれは

秋日さす都會の道にわれおもふ一國のことは
豈たはやすからず

わが庭の草をなびけて暑ぐるしく野分の風は
日ねもす吹きぬ

夕飯に鰻も食へどゆとりなき一日一日は暮れ
ゆきにけり

心こめし西洋の學の系統もすでにもの憂し秋
の夜ごろは

つらなめて目のまへを行く群集の心おごりを
われ旁看す

をととしの秋にとととのへし齒なりしが石かみ
しより痛むあはれさ

毬ながらけふおくりこし吉備の栗秋ふけゆか
む山しぬべとぞ

奉祝

アララギはかすかなりとも言あげて新大君に
つかへまつらく

もろともに生れこしわれ等あらた代の大君の
へに空しくいきじ

冬

飛行機の飛ばざるこよひつれだちて雁のゆく
こそ寂しかりけれ

いらだたしき電話の鈴のひびき來ぬ夜半のひ
ととき心たのしむ

利根川を幾むらがりにのぼりくる鰻の子をぞ
ともに養ふ

とし二つになれるをさなご著ぶくれてわがゐ
る前を幾度にても走る

よき人といやしき人の鬪ひを吾は見にけりめ
づらしからず

櫻田門われいでくれば御濠なる青きさざなみは限しらえず

ぬばたまのこの一夜だに病院のことを忘れて山にねむらな

郊外の病院に來て一夜寢ぬなべての土の冷えわたるころ

籠喪

十一月十七日、父紀一身まかりたまふ、行年六十八歳、法號專修院紀阿一道清居士、淺草柴崎町日輪寺に葬る。

わが父を永久におくりてみだれたる心しづむ宵のひととき

しづかなる死にもあるかいそがしき劇しき一代おもひいづるに

かぞふれば明治二十九年われ十五歳父三十六歳父斯く若し

休みなき一代のさまを謔れに勞働蟻といひしおもほゆ

身みづからこの學のため西方の國に渡り二たび渡りき

働きて一代を過ぎしわが父をひたにぞおもふ一家寄りつつ

今ゆのち子らも孫も元祖 Begründer と稱へ行かなむ

しかすがに子孫のために買はざるは美田のみ
と豈おもはめや

おもひ出づる三十年の建設が一夜に燃えてた
だ虚しかり

目の當り目の當りと年を經たるからほのぼの
とせる悲しみもなし

雜歌

兩角喜重氏南米移民狀態視察のため文部省より派遣、一首はなむけす。五月十七日

みすずかる信濃のをのこすごやかにアマゾン
河に小便して來

海外の同胞に（雑誌植民のため）

海外にわれ居りしこともありしゆゑ無理したまふなとぞ書きて送らむ

秩父宮御成婚を祝ぎたてまつる。九月廿八日（東京朝日新聞）

國こぞりよろこぶけふを吾と妻も一つごころに祝ぎたてまつる

大嘗祭 十一月十四日（東京日日新聞）

悠紀主基の田ゐのみのりをあまてらすすめ大神ときこしをします

祭りますみ庭のかがりいろ澄みて神代ながら
の夜は明けむとす

御大典奉祝歌

奉祝歌 其一（青年）

ひんがしの日の本つくに統べたまふわが大君
はかしこきろかも

高御座のぼらせたまふ我大王を世界こぞりて
ことほぐらしき

高山の木々のことごと大海の浪のことごと大
君を祝ぐ

陸より砲のとどろきわたつみに砲のとどろき
祝ぎのとどろき

奉祝歌 其二 （東京日日新聞）

高御座高しりたまふ大君はとよさかのぼる光
のごとし

あまてらすけふの生日に御たからのやまとだ
ましひに障あらすな

奉祝歌 其三 （報知新聞）

十一月の十日のいく日國土をゆるがしたてる
よろこびのこゑ

あかねさす日のもとつ國の大君を世はこぞり
つつことほぎ讃ふ

わが守る勤務しあれば家ごもり時の間さへや
ことほぎにける

國民のよろこぶこゑは陸よりわたつ海より天
つ空より

菊の花咲きのさかりを御民らは園に集ひてこ
とほぎやまず

奉祝歌 其四 （令女界）

いやしかる御民のわれも酒のみて大臣のごと
く祝がざらめやも

北のみ民みなみのみ民けふの生日けふの足日
を祝ぎたてまつる

高御座のぼらせたまふ吾大王あふぎまつれば
尊くもあるか

ことさへぐ西くにぶりのともがらもほぎたて
まつるけふのいく日に

國こぞりひとつごころにことほぐやみ空ゆる
がしこゐこそひびけ

をとこをみな老も若きもをさなごも一つごこ
ろにほぎまつるなり

たかみくらけふはのぼらすわご大君いよよ新
しき國統べたまふ

奉祝歌 其五（同上）

大いなる白菊の花ひむがしの聖王のくにの白菊のはな

新世をしろしめし給ふ大王のみまへにほふ菊のたまはな

九重の御園生にしてあな尊と黄菊白菊咲きみてりけり

ともしびをはり

後記

○

「ともしび」は「遍歴」に次ぐ私の第六歌集であつて、大正十四年歸朝した時から、昭和元年（大正十五年）、昭和二年、昭和三年に至る四年間の作九〇七首を收錄した。私の四十四歳、四十五歳、四十六歳、四十七歳の時に當つてゐる。

私は大正十三年十二月二十八日の火難にあひ、青山の家に歸つて來た時には未だ餘燼が立つてゐた。以來私は艱難の生活をしたが、昭和元年、府下松

原村に病院を復興し、昭和二年五月から青山腦病院長になつた。私は病院の復興に精根をつくしたけれども、辛うじて作歌をつづけることが出來、生活の足しに雜文をも草し、安居會にも出席し、講演にも出かけた。さうしてその間、大正十五年三月廿七日島木赤彦氏が歿し、昭和三年十一月十七日養父紀一が歿した。

赤彦氏歿後、岡麓・中村憲吉・土屋文明の諸氏と共にアララギ發行に骨折つた。作歌は本業に力を致したがために、飛躍は無かつたが、西洋で作つたもののやうな、日記の域から脫することが出來た。

○

燒あとにわれは立ちたり日は暮れていのりも絕えし

空しさのはて
ゆふぐれはものの音もなし燒けはててくろぐろと橫
たはるむなしさ
かへりこし家にあかつきのちやぶ臺に火焰の香する
澤庵を食む
家いでてわれは來しとき澁谷川に卵のからがながれ
居にけり
うつしみの吾がなかにあるくるしみは白ひげとなり
てあらはるるなり

×

ひとりこもれば何ごとにもあきらめて胡座をかけり

夜ふけにつつ

娑婆苦より彼岸をねがふうつしみは山のなかにも居

りにけむもの

かりがねは遠くの空を鳴きゆけり夜ふけし家にかな

しむときに

火難後艱難の生活をしたときに、かういふ歌をも作つたのであつた。その當時のいはゆる破調の歌なども交じつて居るし、『火焔の香する澤庵』の歌などは、苦しいなかにかういふ客觀的表現をも敢てしたのであつた。澁谷川に流れる卵の殼の歌は古泉千樫も褒めたし、『白ひげとなりてあらはるるなり』の歌は、島木赤彦も褒めてくれたりしたものであつた。併し全體として、『悲

しい歌』ばかりである。『娑婆苦より彼岸をねがふ』の歌は、芥川龍之介氏が私に會ふたびごとに、この歌のことを話した。

かなしかる願をもちて人あゆむ黑澤口のみちのほそ

さよ

さ夜ふけて慈悲心鳥のこゑ聞けば光にむかふこゑな

らなくに

歸京した年に、島木赤彦と共に、木曾に遊んだときに出來た歌の二つである。歐羅巴から歸つて來て、また日本の風光に接したときの感慨がいくらか出て居るのであつた。

空海のまだ若かりし像を見てわれ去りかねき今のう

つつに